

赤ひげ先生奮闘記!

東北中央病院が掲げる「心温かい信頼の医療」という基本理念のもとに診療を行う糖尿病内科を率いる岡村将史先生に、患者さんとのコミュニケーションのあり方についてお聞きました。

患者さんをはじめ、地域の医療機関、チーム内のコミュニケーションを大切にしています。

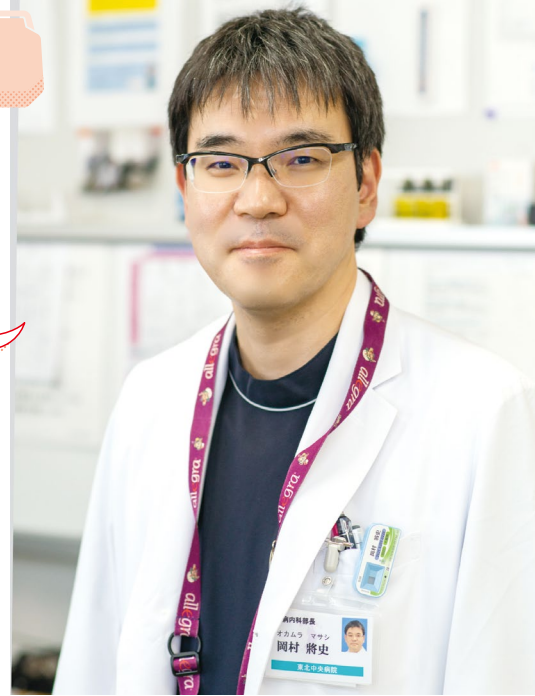


PROFILE

東北中央病院糖尿病内科部長(山形県)

岡村将史先生

おかもら・まさし 2001年東北大学医学部卒業。岩手県立宮古病院、東京大学先端科学技術研究センター、東北大学病院などを経て、18年東北中央病院代謝内分内分泌科・部長、19年から現職。



分かりやすい説明のために 医師も勉強を

東北中央病院で糖尿病内科部長を務める岡村将史先生。「診療で大切にしていることは、患者さんとのコミュニケーションです。生活習慣病の診察では、患者さんの趣味や家族などの生活背景について聞くことも必要です。会話内容もカルテに書きとめ、次の診察時に話題にする」と、「先生は話をきちんと聞いてくれている」と表情が前向きに変わるのが分かります。

患者の状態をより深く理解するために、患者自身が血糖変動をリアルタイムでモニターできる測定器の導入などにも積極的に取り組みます。効果的なコミュニケーションを図るには「我々も勉強して理解を深め、分かりやすく説明できるようにしておくかななくては」と、医師自らも律することの重要性も語ります。

糖尿病治療は地域やチームとの連携あればこそ

国民健康・栄養調査によると、いわゆる糖尿病有病者と予備群の合計は約2000万人と推定されており、糖尿病関連の

医療費は1兆2000億円以上に及びます。

岡村先生はこの現状に、「医療費抑制のためにも透析患者を減らすことは肝要ですが、約5000人とされる糖尿病専門医だけの対応では事実上不可能な状況で、各種医療機関との連携は必須です」と指摘。同院でも地域医療連携を進めており、軽症の患者はクリニック等で診療し、複数の合併症をもつ場合や血糖管理が困難などの重症患者については、同院で対処する体制をとっています。

「開業医の先生方とも手分けして地域全体でフォローしていく仕組みをつくっていかないと、糖尿病治療そのものが成立しません。そうした協力関係を大事にしたいです」。

糖尿病内科では、地域住民も

対象に糖尿病教室を開催してきている他、科内での勉強会などを通じて、「スタッフの連携強化によるチーム力の向上」にも努めています。患者さんのみならず、地域の医療機関やチーム連携を重視する岡村先生の取り組みの軸は一貫して「コミュニケーションにあります」。

スタッフとのコミュニケーションを大切に
チーム力を磨く。



PRIVATE COLUMN

毎週末のウォーキングが楽しみ

スポーツが好きな岡村先生ですが、「学生時代にゴルフをやっていましたが、今はもっぱら週末のウォーキングです。山形市に引っ越してきたことがきっかけで、街の様子を知ることができ健康にもよいのでずっと続けています。朝暗いうちから3kmほどを30~40分かけて歩いています」。道すがら目にとまったシーンを撮るのも楽しみの1つだそうです。

